

これからのお寺を考える情報誌

Vol.
5
2013

みくら

3月1日(金)
トークセッション
寺業再興
会場：應典院

特集

寺業再興

少子化や葬儀スタイルの変化などにより、
今、お寺の存立基盤が大きく揺らいでいる。
では、持続可能な、新たな「寺業」の
モデルとはどのようなものなのか、
どのように生み出していけばよいのか。
NPOとの協働事業などをヒントに考える。

特集・秋田光彦・松本紹圭

浄土宗大蓮寺住職 浄土真宗本願寺派僧侶

特別記事・樋口伸生・押尾章治・武藤頼胡

浄土宗無量壽庵住職 建築家・UA主宰 終活カウンセラー協会理事

平成 25 年 3 月 1 日 (金)

トークセッション

寺業再興

地域のいのちを支える「ソーシャルビジネス」入門

ゲスト

(敬称略：順不同)

秋田光彦

浄土宗大蓮寺住職

松本紹圭

浄土真宗本願寺派僧侶

深尾昌峰

龍谷大学公共政策学部准教授

塚崎智志

野村證券金融公共公益法人部公共公益法人課課長

日時 平成 25 年 3 月 1 日 (金曜日・友引)
13 時～17 時 (午前中に見学会、夜に懇親会あり)
会場 應典院 (大阪市天王寺区下寺町 1-1-27)
参加費 3,000 円 (懇親会 4,000 円)
定員 100 名 (定員になり次第、締め切ります)

主催 みんてら / 共催 應典院

協力

社会福祉法人 大阪ボランティア協会・特定活動非営利法人 大阪 NPO センター・特定活動非営利法人 きょうと NPO センター・公益財団法人 京都地域創造基金・虚空山 彼岸寺
龍谷大学深尾昌峰研究室・大阪市立大学山田仁一郎研究室
(順不同)

宗教法人の公益型事業のモデル見学<参加費無料>

3 月 1 日 (同日) 午前 11 時～12 時

大阪の浄土宗光聖寺が直営する「蓮美幼児学園」は、お寺の親子教室として知られ、乳幼児向けの教育活動にも取り組んでいます。施設見学と光聖寺住職秋田光哉師のお話、および秋田光彦師による趣旨説明があります。

希望者は、午前中の見学会にも参加される旨を、下記申込み先の URL か fax にてお申込み下さい。

なお、無料見学会の「蓮美幼児学園」は本会場應典院までは徒歩 10 分の距離です。

【お問合せ】 みんてら (川本商店 tel.048-254-2222、担当=業務部 遠山) までお願い致します。

【お申込み】 <http://uemachi.cotocoto.jp/event/97399> か、または、上記担当者あて fax (048-254-0888) で、

①名前、②連絡先、③午前中の見学会・夕方の懇親会の参加の有無をお書きの上、送信をお願い致します。



秋田光彦 (あきた みつひこ)

1955年大阪市生まれ。浄土宗大蓮寺住職、パドマ幼稚園園長。97年に大蓮寺塔頭「應典院」を再建し、地域での社会・文化活動の拠点としてさまざまなセクターと協働する。相愛大学客員教授、総合幼児教育研究会代表理事など。



松本紹圭 (まつもと しょうけい)

1979年北海道生まれ。浄土真宗本願寺派光明寺僧侶。東京大学文学部哲学科卒業。超宗派仏教徒のウェブサイト「彼岸寺」を設立するなど、仏教界のトップランナーとして注目される。南インドでMBA取得。若手住職向けに「未来の住職塾」を開講中。

人口が激減し、家族が縮小して、日本社会は無縁化の波に呑みこまれつつあります。同時に日本の家族制度とともに維持されてきた、寺院の存立基盤そのものが崩れはじめています。葬式仏教批判は根強く、団塊世代の間では、「直葬」を選択するケースも珍しくなくなりました。

一部の豊かな寺院を除けば、多くの寺院はやがて経営困難に陥り、現在7万6千ヶ寺ある寺院は6千ヶ寺まで減少するという指摘もあります。まさに寺院経営にとって「危機の時代」が到来しているのです。

しかしながら、既存の教団や寺院社会はその危機を顧みず、従来の制度に安住したまま自らイノベーションを起こす気配はありません。住職世代には、その発想やスキルも乏しく、もはや次世代に継承すべきものは負の財産しかないと嘆きも聞こえてきます。

しかし、一方でこの変化に 대응べく、寺院の社会化も始まっています。寺院自らが社会貢献活動に関わったり、NPOと協働した新たな事業モデルも生まれつつあります。寺院が抱える無尽蔵の資源を、社会に向けて発揮していこうという試みです。そこには、これまでの葬式仏教で維持されてきたものとはまったく異なる、新たな事業化への着眼が秘められています。当然そこには「お寺と収益」という不問とされてきた現実課題も透けて見えます。

危機の時代、次世代住職がどのような知恵と実践で、変革の風を起こすのか。また、一過性のボランティアで終わらない、持続可能な「寺業」モデルをどう備えることができるのか。それは、宗教法人が本来の公益性を担保しながら、どのように経済的に自立していけるのか、という最大の課題を孕んでいます。

本企画では、僧侶の側から松本紹圭師と秋田光彦師、研究者の立場から深尾昌峰氏、民間の立場から塚崎智志氏を招き、「寺院のソーシャルビジネス」について、理論と実践の両面から語りあいます。単なる「収益事業」ではなく、お寺が地域に貢献し、イノベーションを促進するためのノウハウなどを相互に学び合うものです。

お寺の原点である、「学び(教育)」「癒し(福祉)」「楽しみ(文化)」をどのように再興するのか、とくに次の世代の僧侶の参加を歓迎します。



深尾昌峰 (ふかお まさたか)

1974年京都府生まれ。きょうと NPO センター常務理事、京都コミュニティ放送副理事長、京都地域創造基金理事長、龍谷大学政策学部准教授。大学・大学院在学中からボランティア活動やきょうと NPO センターの構想づくりに参画してきた。



塚崎智志 (つかざき さとし)

1968年福岡県生まれ。野村證券株式会社 金融公共公益法人部公共公益法人課課長。1990年に野村證券入社後、波谷支店、福岡支店など歴任した後、2006年から現職。主に宗教セクターを担当する。

目次

特集 寺業再興

06 寺業再興へ向けて 秋田光彦

10 「未来の住職塾」を始めてみて 松本紹圭

特別インタビュー1

14 被災して気づかされたこと 樋口伸生

16 “日常”と“祈り”を往還する場 押尾章治
震災慰霊広場「祈りの杜」プロジェクト

特別インタビュー2

17 何のための“終活”か 武藤頼胡

貴寺院様へお知らせ

『みんてら』の新たなる船出

ご愛読いただきました『みんてら』は次号より、装いを新たに再出発をいたします。

新『みんてら』では、「仏教とお寺」を、多角的な視点から紹介することを通して、そのエッセンスを一般の方々にまで幅広く伝えていきます。

誌面に登場いただく方々も、仏教という枠にとらわれず、幅広い領域に求めていきます。

新しい誌面を通して仏教やお寺がより身近な存在となり、生き生きとその本来の意味が認識されるようになること。さらに、現代という困難な時代の中で軽視されがちな心の問題にわれわれがじっくりと向き合える機会を生むと同時に、現代（いま）をしなやかに生き抜くための知恵や新しい価値観を育むきっかけをつくることができると考えています。

新生『みんてら』もまた、これまでと同様に厚いご支援をいただけると幸いです。

特集

寺業再興

少子化や家族のあり方、
葬儀スタイルの変化など、
社会の大きな変革の波を受けて、
お寺は今、存立基盤が揺らぎ、
大きな危機を迎えている。

では、これからのお寺の経営を支え
かつ、持続可能な、新たな「寺業」の
モデルとはどのようなものなのか、
どのように生み出していけばよいのか。
そして、僧侶はこの時代、
「寺業再興」のために
どのように自らを
イノベイトしていけばよいのか。

NPO との協働事業、さらに、
「未来の住職塾」の実践などを
ヒントに考える。



特集 寺業再興

「インタビュー」秋田光彦

寺業再興へ向けて

大阪天王寺区の應徳院は、演劇などの芸術活動に場所を提供する異色の寺院。

その代表として、葬式仏教の枠から踏み出て、いのちの文化を創造する場の構築へ向けて

さまざまな活動を行ってきた秋田光彦師に、NPOとの協働などを中心に、

お寺の再興へと向けた考え方やアイデアを語っていただいた。

秋田 若い僧侶から時々相談を

受けることがあるのですが、お先真つ暗でもうやっていけないみたいな話になってしまう。戦後の寺院のあり方は高度成長と担保されてきたわけですが、それをそのままやっていこうとすると、少子化や家族や地域関係の変化などの社会的な問題に直面せざるを得ないわけで、それでお先真つ暗というのはおかしんじゃないか。

それでは、そもそもお寺とは何か。もともと日本の公益の基盤は、民が自らつくりあげてきたもので、その多くの中心になっていたのがお寺だった。医療や福祉や教育といったものの母体

であったことは歴史的にも明らかですが、そういう話が今、全部すつ飛んでしまっていますね。

戦後の日本社会の要請に従ってつくられたお寺のスタンダードは、もうその軸心がぐらぐら揺れて、保てなくなってきたわけですね。その中で、なおスタンダードであってほしいという願望にいまだにとらわれ、それ以外に視野が広がらず視野狭窄に陥っている。そこで、じゃあ新しいことを始めるんですか？というようになりますが、そうではなくて、お寺の原点に戻ってみたらどうか。学び、癒し、楽しみ、今風に言えば、教育、福祉、介護や芸術文化ですね。

NPOから 学ぶ

秋田 民主党の鳩山さんが政界を引退するようですが、彼が言った「新しい公共」というのは、公益を官が独占して民に分配するモデルではなくて、公益や公共のあり方をもっとボトムアップの発想で考えられないかということだった。これは、別に新しいことではなくて、昔に戻ることになんです。それを宗教を軸にはできないから、NPOというミッションの共同体へとすげ替えて発想した。でも、寺からすると、わざわざそんな回り道をしなくても寺が原点へ戻ると

いうことはいんじゃないかと。

宗教と政治はお断りつてどこへ行っても言われますが、いくらでも乗り越え方はある。そういう手法そのものをNPOから学ぶ時代になっているんじゃないかなと思っているわけですね。

NPOも、最近はソーシャルビジネスとかいう言い方があって、これは明らかにひとつの社会の潮流となっていて、世界的な組織や企業も注目しています。そういうものをお寺が引用することによって、新しい「寺業」のあり方を考えることができる。こうしたことを言うと、必ず、一定の年代の人たちはお金儲けだと言いますが、では



秋田光彦師

NPOは何だと。NPOにももちろん収益があります。聖と俗を完全に別の価値概念として考えようとするのはわかりませんが、お寺の収益が全部お金儲けだと否定されたら、日本の寺院は潰れてしまいます。だからその聖と俗の間にある中間的な領域を僕らは今見ようとしているのかもしれない。これはやりようによつたら新しい制度の再考ということにまでなり得るんだと思います。

ですから、むしろこれをチャンスとみて、お寺が事業をするというのはお金儲けが目的なのではなく、社会におけるお寺のあり方をどのように開発していくのか、そのヒントを学ぶ場としていかなければいけないのではないか。

**理念だけでなく
経済的基盤も**

秋田 エンゲージドブディズム（社会参加仏教）がここ10年ほどで広がってきて注目しているのですが、それだけで自立しているのはむしろ難しい。ほとんど社会に出て、ホームレス支援とか、自死者、自死を念慮する人とか、遺族をサポートしている仏教者

いくらでも
乗り越え方はある。
そういう手法そのものを
NPOから学ぶ時代
になっているんじゃないか。

がたくさんいます。それはとてもすばらしいことだけど、それが7万6千のお寺の自立基盤になるのかどうかは、また別の話ですよ。

介護関係では、宗教法人のままNPOの認定を取らずしてデイケアをやっているところもあります。それから今、認定子ども園というスキームがあつて、やる気になればお寺のまま保育園、保育事業に参加することもできる。こういったものは公的資金が入りますから、基本的には潰れない。そういうことに何で眼を向けないのかなと思いますね。

應典院では公開された助成金を取っていますが、会員制で運営するところもあります。そういうような形でまず身近なファンドというかお金をしっかり獲得していく。こうしたことには高いスキルが必要ですが、いろいろなことをやっていかないといけない。単純にやる気だけではだめなんだと思います。

**お寺と仏教の
ポテンシャル**

——危機感はあるが、何をすればいいかわからないという時に、足元を見るとどうか、お寺や仏教のポテンシャルにまず自覚的になるというのにも必要ですね。

秋田 ポテンシャルというのは、ポテンシャルのままだったら単なる死蔵ですね。そこからほんとのアビリティをどう引き出していくのかに僧侶の役割があるんだと思いますが、それが無理であればNPOと協働してはどうかと。應典院がやっているのはそれで、お寺は場所を提供しますが、活動のほうはほとんど皆さんが来てやって下さいと。

——僧侶が全部を引き受けるのではなく、外部の人と連携する。秋田 ただ、外部とやる時に共通言語がないんですね。僧侶は外部との対話の機会が極端に少ないので、一歩外に出るとわかり合えない。そのための訓練をしないとけないから、まずは、事業計画書よりもコミュニケーションスキルのほうが先じゃないかと実は思ったりもします。

——仏教とお寺のポテンシャルを自覚していく中で、仏教本来の、命の抛りどころとなる、あるいは、そうした文化をつくり育てていくというようなことも広がっていくのではないのでしょうか。

秋田 当然ですね。それをわざわざ布教しなくても、そういう振る舞いとか関わりを通してしみ込んでいく教化というか。

これまで葬式仏教では基本的に言語を駆使します。これはこれで確かにひとつの様式ではあるんですよ、僕もやっていますから。でも言語を駆使してもそれだけしか伝わらないのであ

れば、非言語の世界、たとえば黙って人の話を傾聴するということが大切になってくる。寄り添いながら、一緒に働くとか暮らすとか、そういう共同型、共振型のもは今までの布教の王道からはほとんど対象にされてこなかったんですが。でもこれからは、そうした関係性の中からしみ出てくる仏教、関係の中で分かち合える救いの一体感、そうしたところになり直すといいと思います。

ここで少し警戒しないといけないのは、そこに「布教根性」がはびこってしまうと、手段と目的が逆転しないかということ。それはちよつと自重しなければいけない。そんなことをすると公的な支援は絶対に受けられない。公共的な宗教は、一宗一派の入信勧誘のためにやるんじゃないですから、そこを勘違いしてはいけません。

新しいローカリズム

——お寺の原点にあった「学び

秋田師が代表を務める應典院では、従来の寺院にはなかった幅広い活動が行われている。上：演劇祭 space × drama2012 劇団「Micro to Macro」公演風景 下左：應典院落慶記念・橋口譲二「職 1991-1995 WORK ~日本と日本人を知るための仕事」 下右：トヨタ・アートマネジメント講座 vol.51 のパネルディスカッション「まちとアートの練習問題」



應典院の活動

と癒しと楽しみ」、これはどのようにして再生していくのでしょうか。

秋田 通常、学び、癒し、楽しみという、制度としての病院や福祉施設、学校といったものを連想しがちですよ。應典院

では演劇をやっていますが、これは通常の演劇の常識からは完全に外れてしまっている。そもそもお寺でなんで演劇をやるの？と。でもお寺と演劇ということのその差異の中に、逆説的ですが、現代のお寺が失ったも



制度や管理だけではもう
人間の死を支えきれない。
そこにはもうひとつ
まったく別の物語が必要で、
どういう逝き方がいいのか、
どういう見送られ方がいいのか
という死生観のところまで
踏み込んでいかなければいけない。

秋田光彦
1955年大阪生まれ。浄土宗大蓮寺住職、應典院代表。
パドマ幼稚園園長。

7万6千のお寺の多くがイ
ノベーションへと向けて動き始
めたらとても面白いものが……。
秋田 そう思うでしょ？僕は昔
からそう思っているんですけど。
7万6千の1%でもいいから、
本気でやったら日本社会が変わ
るかもしれないと思うんです。
これから、団塊世代が平均寿
命に近くなると大量に人が亡く
なっていくますね、20世紀の後
半は少子化で、21世紀の中盤以
降は多死な社会。その時に、単
に病院や福祉というような制度
や管理だけで人間の死を支えき
れるのか。もう支えきれないで
すよ。そこにはもうひとつまっ
たく別の物語が必要で、どうい
う逝き方がいいのか、どうい
う看取り方、見送られ方がいいの
かという死生観のところまで踏
み込んでいかなければいけない。
でもこれは国ではできないはず
で、死生観を普遍的な形で提示
していけるのは、お寺だけなん
だと思いますよ。

の何か、ポテンシャルが見出
せられると思ってるんです。たと
えば、物語の可能性とか身体感
覚とか。

そういうことがはつきりして
きたのが、98年以降にNPO法
ができてからだだと思います。た
とえばNPO法人が設立する学
校ってあるんですね。あるいは
介護保険。介護保険というのは、
担い手を一気に拡散したわけで
す。これには善し悪しがあるん
ですけれども。

NPOはあの法律で自立でき
るようになった団体がたくさん

あります。芸術文化団体も少な
くない。学び、癒し、楽しみを
自分たちで再生しようとしてい
ます。逆にいえば、マスで官が
一元管理一元支配することはも
う限界なんだということをもん
なわり始めた。それをどのよ
うに地域に返していくのかとい
うそのカウンター、地域の担い
手として新しい社会組織として
NPOを創設した。

そういうふうと言った時に、
そのままお寺に当てはまると思
うわけです。地域の生老病死
を見つめてきたお寺だからでき

ることであるはずですよ。ね
仲間を募って、NPOをつくっ
て、住職がその理事長を兼ねた
らしいんです。ダブルインカム
でも構わない。

だから、その今までの制度と
か体制の中で語られてきた福祉
教育ではなくて、もうひとつの
オルタナティブな教育のあり方
福祉のあり方を、新しいローカ
リズムで、地域の中にどのよう
につくりだしていくのか。そう
思うと7万6千というのはもの
すごい戦力ですよ。これを使わ
ない手はない。

7万6千の1%で
社会が変わる

特集 復興再業 寺業

「インタビュー」松本紹圭

「未来の住職塾」を始めてみて

寺院内カフェ「神谷町オープンテラス」や音楽イベント「誰そ彼」、さらにウェブサイトを「彼岸寺」などの運営を通して、現代の仏教のあり方を問うてきた松本紹圭師に、2012年の5月からスタートした「未来の住職塾」について話をうかがった。

—松本さんは「未来の住職塾」を今年（2012年）の春から始められて、東京、京都、金沢、広島の4会場で講座を開かれています。まずは、これを始められた動機からうかがえますでしょうか。

松本 自分自身がお坊さんになつてからの経験を活かしてお寺を活性化していきたいというのが、大きな動機のひとつとしてありました。

お坊さんになつたのが2003年で、それから「神谷町オープンテラス」や、「誰そ彼（たそがれ）」という音楽ライブでしたり、インターネット寺院の「彼岸寺」などいろいろし

てきましたが、自分のやってきたことをもうちょっと大局的な目から整理したいという気持ちもありました。その上で、ひとつのお寺だけでやっていても大きな動きにはなりにくいので、横に広げて、いろんなお寺でその土地や状況にあったことが起こってくるような、そういう基盤づくりに貢献できるようなことをしたいと。

そうしたことをしていくには、いずれにせよまず自分自身が分析的かつ戦略的な物の見方を身につけなければと思い、MBAを取りにインドへ留学もしました。MBAは主に企業向けのもですが、お寺に使えることも

沢山あるので、それを自分なりに咀嚼して、お寺の役割は何だろうというところから考え直しました。お寺を再定義した上で、今の時代に合った形での原点回帰を皆とシェアするための講座として始めたのが未来の住職塾なわけですね。

マネージメントとリーダーシップ

—どういふ方が受講されているのでしょうか。

松本 副住職の方が多いですが、住職と合わせて9割ぐらいではないでしょうか。年齢的には、30代後半ぐらい。いろんな宗派の方がいらっしやいますね。

講座は1年に6回で、今年はお寺のマネージメントと住職のリーダーシップが大きなテーマでした。マネージメントのほうは、そもそもお寺というのは社会の中でどういう役割を果たしていくのかという、根本的なところにフォーカスして、お寺の使命とかヴィジョンを皆でそれぞれ再定義する。そして、ヴィジョンが見えてきたら、そこに向かつて行くためにはどのような運営していけばよいのかを、戦略とかマーケティングとかの観点からもうちょっと解きほぐしていくということですね。

テキストは私が書いたものですが、学校のように先生が一方



松本紹圭師

今の時代に合った形での
原点回帰みたいなことを
皆さんとシェアするための
講座として始めたのが
「未来の住職塾」なんです。

——カリキュラムはこれからどう変わっていくのでしょうか。
松本 今年やったのは、非常にベーシックな部分です。当然基

礎が固まらなければ、そこから先入観を壊すというの、この住職塾のひとつの役割かなとは思っています。お坊さんは自分で自分の可能性に蓋をしまっているところが多々あるんです。

的に話してということだともうたいたくない。せつかくその場にやる気のあるお坊さんたちが集まってきているわけですから、テキストはなるべく事前に読んできていただいて、集まった場自体は皆でワークをしていたらいい。デイスカッションもしますし、いろいろ手を動かしてアイデアを出し合って分類したりとかもしたりするということがいい。——初めてやられてみて、皆さんの取り組み姿勢、あるいは反応や感触はどうでしたか。
松本 やる気いっぱいの方が

りで、講師冥利に尽きるということか、やっていて楽しいですね。打てば響く、そんな感触があります。
「死」から「生老病」へ
松本 先ほどお話ししたように、プログラム自体にそもそもマーケティングの観点が入っているの、講座では、徹底的に顧客の視点に立つということを姿勢として身につけて頂きます。何をやるにせよそこから始めるということになっていけば、仏教を説くときにも、当然これでは

伝わらない、意図していることが実現しないよねっていうことになっていきます。
お寺の成果をどこに見ていくかと言えば、人の心をおいて他に無いので、講座でも自然と、地域の人の心を支えるということが、基本になると思いますね。
——その時に、僧侶がカウンセラーのような役割を果たすようになるのでしょうか。
松本 皆が皆、そうなるかというところ、また難しいところで、あり方は別に一様に決まなくてもいいと思うんですね。ただ、お寺は今、葬儀とかお墓など、死を

メインに据えて、そればかりをやるようになってしまっているわけですよ。
もちろん、葬儀やお墓など、人の死にかかわる部分をカバーすることはとても重要なことですが、仏教はもとも「生老病死」という人生全体の苦しみをテーマとしているはずなので、もう少し「生老病」のほうにも広がってほしいのではないかと思います。
——そのあたりの認識が、少し薄くなっているのではないかと。
松本 ぼんやりとはあっても、たぶん死に関する部分だけを扱うことに長い間慣れ過ぎて、他のことをする、できるといことが発想にすら無くなっている。ですからその先入観を壊すというの、この住職塾のひとつの役割かなとは思っています。お坊さんは自分で自分の可能性に蓋をしまっているところが多々あるんです。

本は大事ですから、継続してやっていこうと思っっています。それに加えてもう少し発展的に、こういう講座もあったらいいんじゃないかというものを、少しずつ単発の講座でも取り上げていければとは思っています。

たとえば、経理とか、具体的にたぶん必要になるところでしようし。あとは税務とか。ただ、誰が何を教えられるかという問題もあるので、現時点では、そのあたりはあまりはつきりとは決まっています。

上：ウェブサイト「彼岸寺」のHP。下左：寺院内カフェ「神谷町オープンテラス」。下右：「未来の住職塾」講座風景。
 [2013年度未来の住職塾プレセミナー日程]～1/9(水)金沢 地場産業振興センター
 1/22(火)東京 神谷町 光明寺
 2/1(金)福岡 福岡商工会議所
 2/6(水)大阪 應徳院
 2/7(木)名古屋 東別院会館
 2/18(月)広島 普門寺
 詳細 <http://www.higan.net/juku>

松本紹圭師の活動

心の産業へと移行させる

「さきほどの「地域の人の心を支える」というお話は、2010年に出版された著書で、寺の経営の基盤を先祖供養産業から心の産業へと移行させることを目指す、と書かれていることと重なりますね。

松本 先祖供養というの、それ自体、当然心にかかわってくることはありますが、もう少し広く、苦しみや悩みに寄り添って行くようなサービスや役割があってもいいんじゃないかと。ですから、その意味ではお坊さんの役割もこれから求められることが増えるというか、増えないともう存在意義がずいぶん薄れてきていると思うんですね。儀礼自体が心の支えになる

というのはいさぐくあるので儀礼というのはとても大事なんです。たとえば、もつと話を聞いたりするとか。お経だけ読めればいいという時代は終わったんだらうと思うわけです。

とはいえ、お坊さんが皆、スー

パーマンのように何でもできるわけではないので、それぞれの得意な分野でもうちょっと役割を広げていくということが重要になってくるんじゃないかと思えます。特に心を支えるというひとつの役割を念頭に置きながらですね。

——同じ著書の中で、そのコンテンツからすると、仏教は21世紀の成長産業になるに違いない、とも書かれています。

松本 それはかなり期待も込めて書いたんですが、そういうふうになっていかないと、日本の今の社会の雰囲気、どこか軸がなくてフワフワしていますね。フワフワしているがゆえに、結構危うい、皆、何を基準に価値判断しているのかよくわからなくなっているような感じがある。

そこでズバリ仏教を軸にして頂きたいということではないんですが、自分の軸をしっかり定めていくために、仏教はすぐ役立つと思っただけで、だから皆が皆、仏教に一生懸命になってほしいというのではなく、自分なりの軸をそれぞれが持てるような、そう

いう社会づくりに、仏教は役に立
てるのではないかと。

血の通った言葉で 自身の心から話す

——フワフワして軸のないこの
時代は、1998年からこれま
で、自殺者を3万人以上生み出
し続けていて、生きることがと
ても難しい時代ですね。経済至
上主義で効率を追い求め、際限
のない欲望みたいなものが社会
の駆動力になってしまっている。
こうした時代に、仏教はそうい
う生き方に対する非常に有効な
オルタナティブ（対案）になり

得るのではないかと、あるいはこ
ういう時代にこそフィットする
のではないかと思いますか。

松本 私は本当にそう思います
し、根本的な価値の部分では、
非常にフィットしていると思
いますが、ではそれが今の人に伝
わるか、伝わるように翻訳でき
ているか、それ自体をお坊さん
自身が生きているのか。

人の話を聞く時に当然話して
いる内容がわかりやすいとか伝
わりやすいということもとても
大事ですが、もうひとつ大事な
ことは、とてもわかりやすいけ
れどこの人の話は聞きたくない

ということでは困るわけで、こ
の人の話だったら聞いてみよう
かなと思える人であるかという
ことです。

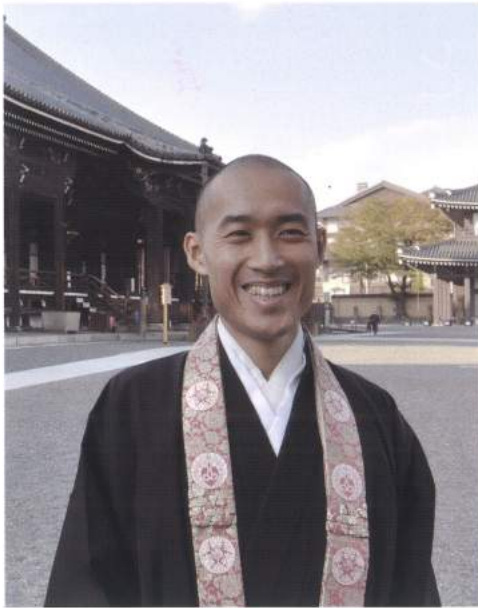
血の通った言葉で、その人自
身の心から話しているのか。そ
の人自身に魅力があるのかどう
か。伝えるという仕事は、そう
したことまでを含めてやると成
り立ってくると思いますので、
そういう面ではお坊さんという
のは、結構求められることの
大きい仕事だと思うんですね。
そういうことに気がついてい
ない人が多いのですが、でもそ
うではいられなくなってきたま

すから、ちょうどいいと思うん
ですね。仏教界に限らず日本と
いう国が、今、生まれ変わらな
ければ存続できないという状況
だと思っております。

——今の、一般の人に伝わるよ
うに翻訳していくというあたり
は、住職塾でというよりは、ご
自身の活動の中でやられていく
のでしょうか。

松本 そうですね。私自身もやっ
ていきたいと思ってますし、お坊
さん一人一人がやっていかないと
いけないことですね。そのやり方
もその人の個性があつて、得意な
表現だったり、得意な相手だつた
りありますので。でも個人個人で
やりながらも、情報交換をしてお
互いに高め合うような場はつくっ
ていきたいとは思っています。
そういうことをやっていかな
いといけないという意識を共有
する上で、住職塾はひとつのきつ
かけになるんだと思えますね。

2013年度の住職塾本講座
に向けて、1月から全国各地で
プレセミナーを実施しますので、
気になる方はぜひこの機会に体
験して頂きたいです（前頁参照）。



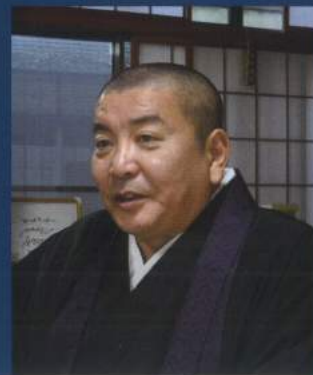
自分なりの軸を
皆それぞれが持てるような、
そういう社会づくりに、
仏教は
役に立てるのではないかと。

松本紹圭

1979年北海道生まれ。本名、圭介。浄土真宗本願寺派僧侶。
東京・神谷町の光明寺でお寺の音楽会「誰そ彼」やお寺カ
フェ「神谷町オープンテラス」を企画。ウェブサイト「彼岸
寺」を運営。インドにMBA留学後、現在は僧侶のためのお
寺経営塾「未来の住職塾」を開講中。

被災して気づかされたこと

宮城県石巻市は東日本大震災で市町村単位では最多の死者・不明者を出した。その中心街に近い門脇町で被災した無量壽庵住職の樋口伸生師に、3.11 以後の体験を通して、仏教者としてどのように感じ、考えたかを語っていただいた。



3月11日に体育館に避難して、それから1カ月間くらいいたんですが、初めは極力お坊さんというカラーは出さないと、単なる被災者の一人として皆で助け合いながらやっていったんですね。でもすぐにそれだけでは済まなくなりました。2日目か3日目で体育館の中で最初の死人が出て、病人が出て、冷静に観察するだけでは済まない、無視できない状況になってきましたね。

震災後の今、やりたいと思ったことはほとんどやるんですよ。考えて、よしこれやっていこうと。震災前もそのつもりではあったんですが、今と比べれば、自分は非常に弱々しかったなと思いますね。宗教に携わっていく人間としてもっと力強く、活動をしていきやいけなかったなあとすごく反省しました。

さらに、この震災のような非常時に陥った時に、昔から読んでいたお経が物凄く、これはこういう意味だったのかあって、本当にリアリティをもって自分の中にドスンと入ってきたんですよ。

これまでの私のお経の付き合い方は、こうしなくちゃいけない

だろうという、生き方の目標、深い心構えみたいなものとして遠い先にあるような感じだったものが、まさにそれは今ここにあるというか、それがスコーンとはまって、今やらずしていつやるんだという、とにかくなんでも今やらなくちゃっていう、完全に駆り立てられるような感覚に満ちあふれてましたね。

善い心は 人に伝わっていく

仏教って基本的には悪いことを止めて善いことをしましょう、心を清くして生き延びましょうということを言いますね。避難所の中でも人の暮らしの中でこれが本当にベーシックなもので、それを乱すとやっぱりはみ出てしまう。炊き出しで列に並ぶのもそうだし、子どもも大人も関係なく、それを守れないとやっぱり人の害になるんですね。

また、体が弱くて寝たきりになっている人が私の脇に何日かいて、その人のおむつを取り替えたりしたんですが、そのおばあさんは、ありがたうという言葉が常にあったのね。その人は自分では食糧運びも何にもできないんですよ。食

べさせてもらって、下の世話も他人にしてもらって…自分じゃできない。

だけどその人はたぶん心根に常にいろんな感謝をしているんだろ。うね。それが言葉に出て、顔の表情、笑顔に出るんですよ。その顔を見ているとやる気が出る。このことは私の愛読の仏教書の中に、体で善いことをしよう、言葉で善いことをしよう、心で善いことをしようって、これは体力に差があっても仏教的に生きることができする方法ですよ。

たとえば体を使えない人は心でやる、心で1時間、2時間、3時間ずっと心に善いことを思っている人は、全身全霊を使って善行をしていることになるし、その心情がよく伝わるんですね。

さらにまた気づいたのは、善いことをしている雰囲気がある人にも善いこととして伝わっていくとか、これまで本で読んでいた言葉が、現実目に見た自分を感化されて動かされていく。善い心というのは人に伝わっていくことを目の当たりにして、こうしたことが本にあるんだなど。

善い種まきをすれば善いことを戴けるモトになるんだとか、善因善果、そういうことも本当にあるんですよ、はつきり。だからお釈迦様の、時代を越えて貫いてきている言葉というのは絶対に錆びつかない。教えを受け入れられる自分の器の形がびたりと来た時にはストンと入って来てそこから微動だにしない。本当に言葉の力、教えの力強さを感じましたね。だから、ますます勉強しなくてはと思いましたね。

津波が生んだある家族の悲劇

この話はいつも話すのが辛いんだけど、津波から避難してから亡くなった女性がいますね。

旦那さんが義理の母親と奥さんと娘が避難しているだろうと心配して、自衛隊のボートを奪い取って自分の家まで漕いで行つた。そしたら、2階の屋根を見つめ、次に3人が1階の出窓の上の庇の上に乗っかっているのを見つけた。2階の屋根の上には登れなかつたんだね、たぶん、女3人で。近くまで行ってよく見たら一人が水に入っていた。エッと驚いてもっと近づいたら、義理の母親

はブルブル震えている。小学校の娘は前のめりに伏して水に浸かっている人の足を抱き抱えている、そしてそれが自分の女房だったと。

どうしたんだと聞くと、バシャーンと音がして気が付いたらお母さんが水に入ってしまった。一晩こうやって足を押さえてお母さんが流れないようにしたと娘がこたえた。おそらく低体温症で亡くなったんだと思うんです。それを押さえていた1年生の娘さん、どんな思いで押さえていたのか。

その方のお葬式が、3月11日の震災日から比較的早い時期にできたんです。葬式を終えた後、旦那さんが四十九日の法要をして頂けますかって私に聞いてきた。

しかし、もうその頃はあの人この人誰彼関係なく、いろんな人が死んだ！死んだ！って私に連絡してくる。毎日その相談で列をなしている状態だった。本当に異常な事態だったので、おそらく奥さんの四十九日ってできないだろうと思つて、「今日全部押んだから大丈夫だよ」と。そして、「浄土宗の教えというのは、四十九日を押んだからとか百カ

日を押んだからいいとか悪いとかではない。できればいいんだけど、やらなくても特別に悪いということではないから、それよりあなた毎日念仏して供養しなさい」って、僕はちゃんと対応できない中でも丁寧に言つたつもりだった。

和尚さんに押んでもらったら

ところが私に断られたから、今度は女房に彼が言ったんです。

「今和尚さんにお願いをしたら忙しいのか断られてしまつて……やつと結婚できて、子どもが生まれて、家族らしい雰囲気になってきたところだった。3人でドイツニールランドに行こうとか、恋女房だったから何か指輪でも買つてやるうかとか、服を買つてやるうかとか、そういうことやりたいなあと思っていたことが何にもできなくなつてしまつた。今私が女房にしてあげられることというのは、人からこれがいいよあれがいいよと言われたことを全部してあげることだ」と。

その中で私が今思いつくことは、和尚さんに押んでもらったら、女房があつた世で安らかになつて、痛

いとか冷たいとかそういうことが無くなつて本当に心地良くなるんだらうなど。仏教とか宗教とかよくわからないけれど、本当にお経をあげて貰えればそのようになつて、幸せな救われた気分になるんだらうなどと思つたのに。

言葉をかえせば、今私ができることは和尚さんにお経をあげてもらうことしかできないんですよ。あと何もできないんです。そういう思いでさつき言つたんですけれども、和尚さんに断られてしまつて私は非常に悲しい……」

それでうちの奥さんが血相を変えて、「あんた何やつたの？つて。あの人すぐぐがっかりしていたわよ」つて。

それを聞いて、ああ判断を間違つた。そうだと。もうお祈りしかここにはないんだと改めて思い直して、確かにそうだと。

人間の気持ちつて、仏様が何をしてくれようがすぐには信仰心は育たないものですよね。すぐに芽生えない。結実を見ないですよ。そういう時に祈りをしてほしいという方の要望というのは、これは最大限やらなくちゃいけないことだと。浄土宗の法然上人の教えに、念仏、祈りをする人に

※「祈りの杜」プロジェクトは、「石巻市 門脇町・ひばり野町・南浜町 祈りの杜をつくる会」を主催者として、支援金によって建設されます。支援金などの詳細に関しては、事務局（川本商店内 tel.048-254-2222 または kawamoto@kanze.co.jp）までお問い合わせ下さい。

震災慰霊広場「祈りの杜」プロジェクト

“日常”と“祈り”を往還する場

押尾章治

樋口師が副住職を務める西光寺の敷地に計画中の祈りのための場所について、設計者の押尾章治氏（写真左）に語っていただいた。

「新たにつくるものは低いものにして下さい。人の背より高いものは棒1本でも怖い」

最初に聞かされたときはショックだった。高さ16mの津波により壊滅的な被害を受け、いまだ強迫的な感覚に拘束される石巻市、門脇・ひばり野・南浜地区の地元の声だ。ちょうど、震災の年の紅白歌合戦でも放映された、津波と火災により廃墟になってしまった門脇小学校がある場所である。今回、その校庭に隣接する浄土宗西光寺の敷地に、東日本大震災により亡くなられた方々の慰霊のため、残された家族や友人たちのところを癒すため、支援金を募って慰霊広場を計画することになった。

親しい人を亡くされた喪失感を埋めるのは容易ではないだろう。肉親を亡くしてもいない者が外から語れるはずもないだろう。震災後1年半以上経った今でも、残された遺族の方たちは、なぜ自分が生きて残ってしまったのかという自問の毎日であるともうかがう。

そんな中で何ができるのだろうか。理解を超える出来事が起きたわけだから、理解など及ぶはずもない。分かった風なことは言えない。し



かし、理解が及ばないままでも時間をかけて祈りを繰り返すことはできる。繰り返し祈るしかない。祈りの杜は、日常生活空間の中の落ち着いた沈思できる場所である。訪れた人が自らと向き合い祈るためには、外の世界からは囲われていた方がよい。しかし地元には、前述したような高さに対する意識もある。囲いは低く計画する。ちょうど、胸の下ぐらいの高さの小さな囲いを重ね合わせて立てることで、広場を周りの世界からやさしく区切るのである。囲いの高さの中に腰を落とししほの間沈思し、亡き人への祈りが捧げられた後には、再び立ち上がって外の世界へと繋がっていくことができる。

低い囲いの中でも、高さ方向を上下する祈りの所作を通じて、囲われて自らと向き合うことと、開かれて社会と繋がることが繰り返される。

気軽な生活空間の中での単純な繰り返しにより、少しでも早くこちらの平静が訪れることを期待してやまない。

は身命財（シンミョウザイ）をかけてお手伝いしなさいって言葉があるんですよ。それを私は忘れていた。

そしてその場ですぐ彼に「悪かった」と頭を下げて、私が間違っていたと。あなたの奥さんへの想いに対して私は全く赤の他人なんだ。だから許してくれと。君の希望通りに、私のお勤めでいいならば、一緒に拝ませてくださいないかと。ということでお勤めをした。

祈ることのお手伝いだけしかできないけれども

そういうことがあって、一方で、自分たちのことを考えてみると、うちの家族は誰ひとり欠けることなく生き残れたわけですよ。そうするとご遺族さんに対しては私たちがもうどんな言葉を掛けてもどんなお見舞い物を持って行っても、彼ら彼女らの心の深いところには絶対手が届かないんだなってわかったんですね。

だからお勤めのたびに、「すみませんが、私の家族は皆無事で誰も死んでません。皆さんと比べたらなんと恵まれていることか、その恵まれていることすらよくまだわからない状態ですが、皆さ

んのこのお勤めの席に私のようなものでよければお祈りを一緒にさせて頂きたい」と。

あの当時、お葬式をする度にこれを言った。私は、あなたたちの悲しみと同じレベルにはなれない。だからただ祈ることのお手伝いだけしかできないけれども、一緒に拝もうよと。そういう自分の申し出に、お寺側の人間は私しかいなかったのだけれども、うちの檀家の遺族さんたちは、いやあ和尚さん頼みますって自分に依頼をしてくれた。

これはやつぱりこちら側でちゃんと身を、心を正してやるぞという姿勢を見せたからだと思う。わかったふりはしない。

そういうことって意外と私たち僧侶の世界には無くてね、実は。なんかお坊さんてさ物知りでいなくちゃいけないみたいな。知らないと言えない職種になっているんですが、それが一番の間違いだと思うんですよ。だからあなたの悲しみに対して何もお手伝いできないけれども、唯一救って下さるのは仏様のお慈悲と気持ちだけなんだと。それにすがらせていただく、ということですね。



何のための“終活”か

終活とは人生の終わりのために行う活動のこと。高齢者が、事前に自らの葬儀やお墓のことを決めておくこととイメージされがちだが、実はもっと射程が広い。終活カウンセラー協会理事の武藤頼胡氏に、終活本来の目的について話をうかがった。

——まずは終活という言葉についてうかがいたいのですが。

武藤 そもそもは2009年に『週刊朝日』の連載で使われたもので、その時の内容は、単に、お葬式やお墓の準備とかいうものでした。普通にお墓の準備とかいうよりも、なんとなく言葉がいいんじゃないかということだったんだと思います。当時、婚活をはじめ、なんとか活動というのが流行っていて、そこに乗る形だったと思います。

私がこの協会を立ち上げたのは、2011年の7月ですが、その1年前の2010年の8月にウェブサイトで終活相談サイトをつくりました。その時に、「人生の終焉を考えることを通じて自分を見つめ今をより良く自分らしく生きる活動のことを終活と言います」と、サイトに書いたんですね。これは今も変わっていません。

——雑誌連載時に比べ、言葉の意味が膨らみ注目度が上がってきた背景というのは？

武藤 やはり、必要になったというところがあると思うんですね。65歳以上の一人暮らしの世帯が500万くらいあるんですが、今までは、自分の死については地域

や家族が考えてくれたものを、自分自身ですべて用意しなければいけない。そういう背景から必要に迫られてきた。それが終活という言葉と相まって、注目されるようになってきたんじゃないかと思っています。

人生の棚卸し

——終活は、だいたい何歳くらいから始めるものなのでしょうか。

武藤 人生の終焉を考えて今をより良く生きようという定義なので、何歳というのはないですね。赤ちゃんが生まれた瞬間に決まっていることは、将来、この子も間違いなく死ぬということ、お母さんから生まれたことだけですね。そう考えたら、何歳からというのはないですね。

就職活動の講師もやっていて、その一環で学生に「人生の棚卸し」というのをしてもらっています。これは終活に必要なことのひとつですが、大学生も自分の人生をどう生きるかということ、自分の人生の棚卸しをしてもらおう。

就職活動では、何のために働くのかという大きなテーマがありますが、そこが見えないままやって

いると皆さん控えてしまう。途中で嫌になっちゃったとか、就職できないうらだつたら死んじゃいたいという子もいる。何のためにやっているのかが見えていないわけです。

何のために仕事をするのか。会社のためでも、親のためでもなく、自分の人生のためにするわけですよ。自分の人生のための就職であって、就職活動というのは、そのための準備をしているだけなんです。

そこが見えているのと見えていないのでは大きな違いがあるんですね。だから終活って何歳から始めるかというところ、もちろん、お葬儀やお墓とか、あとたとえば財産の整理をしましょうということであれば、50代、60代くらいからということになってくるんですが、自らの人生を見つめてより良く生きるという、もっと大きなところで考えるのであれば、終活という言葉を目にした瞬間が終活を始める時だと思えますね。

ありがとうのプレゼン

武藤 この「人生の棚卸し」は2時間かけてやってもらっていますが、

いろんなことが浮かぶわけですね。ある子は自分は一人で生きてきたわけではなくて、いろんな友だちがいて助けてもらってきたということに気づいたり。また、ある子は親に迷惑をかけていたんだとか、いろいろある。

これをやってもらって翌日に「ありがとうのプレゼン」というのをやるんです。そうすると、人生の棚卸しをした後なので、みんな素直な気持ちでいっぱいになり、40人がひとりずつ立ってプレゼンをしますが、2時間、最初から最後までみんな泣きっぱなしでしたね。

ある子は、両親が離婚して今は新しいお父さんがいる。気が合わなくて家を出てしまっただけでも高い学費を払ってくれているのは新しいお父さんで。今でも好きではないけど、でも感謝はしなきゃいけないと気づいたとか、そんな話をしてくれたり。

あと、お父さんを病気で亡くしている子がいて、そのお父さんが最後まで泣かず、弱音を吐かない人だった。だからその子もプレゼンで、今泣きたいくらいな気持ちですが、お父さんの遺志をついで最後まで笑顔でプレゼンしたいと

思いますと話をしてくれたり。そういう話がたくさん出てくるんですね。

未来のワーク

ハッと気がついて、「感謝の回路」のようなものがパッと開けてしまったという感じですね。

武藤 そう、気づくんですよ。

実は、棚卸しとプレゼンの間に、「未来のワーク」というのをやるんです。まずは、明日やりたいことを書いてもらって、さらに、1週間後、1カ月後、3カ月後にやりたいこと、半年後、1年後、3年後、5年後、10年後、50年後という形で書いてもらう。

そして、その紙を置いておいて、今度は50年後になりたい自分を書くんですね。さらに、50年後にそういう自分がいたとしたら40年後はどういう自分じゃないとそうならないかと、未来から逆に戻ってくる形で書いてもらう。そうして、2つを比べると全然違うものになったりする。そこで、あ、そうか、未来の50年後の自分がいるためにこの「今」があるんだって気づくんですよ。

その「今」というのは、この「今」



終活カウンセラー協会の勉強会の風景

終活カウンセラーには初級と上級の2種類がある。「終活カウンセラーというのは、もちろんそれ相当の知識は必要なんです、相談に来られる方の話にしっかりと耳を傾けて、悩みがどこにあってどういうことに困っているのかを見極めた上で、これから人生の終わりにどういうふうに向かっていくのが一番いいのかを一緒に考えていくのが役割だと思っています」(武藤氏)

一般社団法人終末カウンセラー協会
<http://www.shukatsu-csl.jp/>

しかない。一瞬一瞬がどんどん過ぎて過去になっていくので、この貴重な「今」というものに気づいてもらうために、こうしたことをやってもらいます、必ず。それを踏まえた後のプレゼンなので、私はこういうことに感謝して、これからはこうやって生きていきます、までがプレゼンの中に入ってくるというわけです。

人生の意味を考える

——実際の終活の場面では、どういったことがメインになるのでしょうか。

武藤 私は母親が娘にお料理を教えるのも終活だと思っ

ですね。だから特にお葬儀の組み立てを全部したとか、そういうことももちろん終活の一部ではあると思います、自分の人生の終焉をしっかりと見つめてどう生きるのかということ、必ず、では自分はどう生きてきたのか、今後どう残していくのか、何を伝えて行くんだらうということにまずなるわけです。自分の生きた証しですよ。だから証しを残すとすれば、たとえばお料理を教えるのも終活のひとつだと。終焉を考えるための手法として、お料理を教えるのもお墓を考えることも同じだと私は思っています、実は。

——より良く生きていくということに自覚的になっていく、そこで

その人生の意味というものがはつきりしてくる。人生の意味というのは誰にとっても大きな問題ですよ。人生にはやはり意味があったてほしいし、生きてきた証しというのを誰でも持ちたい。そういうところで終活というのは、何か意味を持つてくるといふことですね。

武藤 そうですね。今自分が生きていく意味とか、もちろん私もまだわからないですけども。ただ常にそれを考える意識を持つていくというか、終活というものを意識しているの、というのはありますよね。それはいつも感じていきますね。

武藤 そもそもなぜ自分の生きていく証しを残すのか、終活をやるのか。これが大事で、だからセミナーの中でも必ず、「終活はなぜするのでしょうか」と問いかけて、考えてもらう時間をつくるんです。

終活の必要性とか社会背景とかいろいろなお話をさせてもらったり、終活の定義をお話したあとに、では「何でお墓の準備をするのか」でもいいし「お葬儀の準備をするのか」でもいいですし、どうして終活をするのかをちゃんと考えても

根底にあるのは愛

らいます。そうすると皆さんからいろんな意見が出るんですが、たとえばある人は家族に心配を掛けたくないとか迷惑を掛けたくないとか、自分は一人なので、あんまり迷惑を掛ける死に方をしたくないとか、そういうお話がわりと多いんですよ。

そこで、もつと突っ込んでうかがいます。「では、なんで家族に心配を掛けたくないんですか」と。やはり家族に手間をとらせたくない。「では、なんで手間をとらせたくないのか」。そうすると根底には必ず皆さん、家族への愛があるわけですね。家族が大事だからというのが出てくるわけですよ。

では、家族のいない一人暮らしの方はどうか。そういう人も見知らぬ誰かに迷惑を掛けたくない。愛国精神であったり、自分が人として生きてきたからこそ後世には迷惑掛けたくないと思ってる。奥さんとか子どもという、はつきりした対象はいないんですけども、でもそこには必ず、愛、愛情があつてそういうことをしたんですよ。それが根底にあるんですよ。終活には、それがなくてやっている人はいないと思うんですよ。

終活によって気づく

——おっしゃるような意味での終活をしていく時のあるひとつの意味として、そういうことに対する「気づき」というのがあるような気がします。気づいて、さらにその先に問いを向けて、その時に、今まで気がつかなかったことに気づいていく。そこで人生つて変わってきますよね。世の中を見る目が変わってくる。

武藤 私もよく気づかされるんですけどね。自分でいろいろ言っているだけじゃなくて、いろんな人いろいろな話を聞いて、私自身も気づいていくわけなんです。

最近、今一番売れているという本を読んで本当に勉強になりましたけれど、時間の使い方はあなたの命の使い方なんです。よって書いてあつて、本当にそうだなと思えました。そうなるって無駄な時間なんて1秒も無い。「あー、無駄な時間だったね、これ」ってよく言ってますが、でもそんなことないんですよ。それをやったことがきつと何かになっているんだとか、そういう物の見方に変わっていきますよね。

この貴重な「今」というものに気づいてもらうために、こうしたことをやってもらうんですね。

根底には必ず皆さん、家族への愛があるわけですね。家族が大事だからというのが出てくるわけですよ。

みんてら

発行元
有限会社 川本商店

本社
〒107-0052 東京都港区赤坂 2-21-1

みんてら事業部・川口営業所
〒333-0844 埼玉県川口市上青木 1-7-4
tel.048-254-2222 fax.048-254-0888

定価 480 円 (税別)

<http://www.kanze.co.jp>
kawamoto@kanze.co.jp